

## 食材の大地・北海道、 生産地と消費者をつなぐ人々

これまでは原料を移輸出していた北海道ですが、近年、製造加工や流通過程で商品に新たな付加価値をつける「食クラスター運動」や「6次産業化」が具体的に動き出しています。本連載では、こうした中、消費者を生産地や生産者につなぐ、地域を巻き込んだ新たな挑戦をする人たちの姿を伝えていきます。

### 第6回

# 札幌で農業を スタート！ 子どもたちにも 農作業体験を



スタッフと一緒に

**東海林 幸恵** (とうかいりん さちえ)  
農業生産法人(株)ふるさとファーム農場長

1986年、標茶町生まれ。実家は酪農業。高校まで標茶町で育ち、農業教員を志し酪農学園大学進学のため江別市へ。大学卒業後は農業生産法人で農作業の指導員等を3年担当。2010年からふるさとファームへ。

札幌中心部から定山溪に向かう国道230号（通称「石山通」）を左折し、住宅街を越えるとほどなくビニールハウス5棟と小さな水田が目に見え込んできます。ここは「ふるさとファーム」という農業生産法人の農場です。農業の経験がほとんどない素人が集まり、長年荒れ放題だった遊休農地を、畑は当然のこと井戸や用水路までも再生するところから始め、今年で3年目を迎えました。ここで農場長を任されている東海林幸恵さんに、日々のこと、そして目指す未来について聞きました。

#### — なぜ野菜を育てる仕事を選んだのですか。

もともと「野菜作りをしたい！」という強い思いがあってこの仕事を選んだというわけではありません。きっかけをもらったという感じです。実家は酪農を営んでいたので、農業はいつも身近にありました。子どもの頃は、それが当たり前でしたが、高校3年生の時に進路を考えるために自分自身を振り返った時、私は“農業の幅広さ”が好きだと気づきました。そして、農業に関わる仕事がしたいと強く思うようになりました。

野菜作りの好きなところは、人の食生活に直接つながっているところですね。日々当たり前に必要な存在のひとつが野菜であるということかもしれません。ですから、お客さんたちからの「おいしい」という声や表情にも身近に出会えることがありがたいな、素敵だなと思っています。

#### — どんな一日を過ごしていますか。

明るくなる頃には農場に到着するように家を出ています。まずは、収穫、選別、袋詰めといった出荷準備を行い、配達回りです。納品先は主にコープさっぽろ内の「ご近所野菜」という、生産者が持ち込み陳列を行う売り場です。配達から戻り次第、ハウス内の野菜の水やり、種まき、苗の植え付け作業などですね。夏



農場全景

場のピーク時には、夏の暑さよりももっと暑いハウスの中で一日中収穫という日もあり、日が暮れるまで作業をしています。

### — ふるさとファームの1年はどういう作業スケジュールですか。

農場は、1 haの畑にハウスが5棟あり、ハウス以外の畑には露地栽培で野菜を育てているのですが、3月と4月はハウスや露地に植える種をまき始めハウス内で苗の管理を行います。5月と6月はハウスや屋外の苗の植え付けが忙しく、畑の1年間がおおよそ決まる大事な期間です。7月頃から収穫が本格的に始まります。8月はトマトやトウモロコシの収穫に追われながら秋野菜の種まきも行います。9月は徐々に収穫する野菜が夏野菜から秋野菜へと変化します。10月は日々大根を丁寧にかつ早く抜いて水洗いし、納品という感じでしょうか。11月は白菜の収穫。12月は一年を通して、ちょっと一息つける貴重な1カ月かもしれません。冬の1、2月は新年度の作付け計画（作物、品種の選択）を立てます。また、ハウスにビニールを張ったままハウレンソウを栽培しているので、ハウスがつぶれてしまわないようにハウス周りの除雪が主です。

### — この農場は子どもたちとのふれあいの場でもあるそうですが。

実は私個人としての取り組みとして、農業体験の受け入れを行っています。「1年を通じて子どもたちが農業に触れる時間やきっかけ作りの場になれば」と思い、この農場を使わせてもらっています。

私が小さい頃から土や自然に触れてきたように、子



大根畑とビニールハウス

どもたちにも土に触れたり、野菜の成長を感じたり、自然や生き物の温かさを感じてもらえたらなと思っています。

昨年から栽培を始めたお米は、そろそろ田植えの準備を始める季節になりました。小さい田んぼですが、子どもたちに今年も田植えを体験してほしいと準備を進めています。

### — お気に入りや栽培が難しい野菜を教えてください。

ナスが好きな野菜の一つなので、<sup>せんてい</sup>剪定という余分な花や枝を切り落とす作業をしている時は、全体の花のつき方を見ながら「ここを残そうとか、ここは切ったほうがいい」と考えているのが楽しいです。その結果、ピカピカで長く立派なナスが収穫できるととてもうれしくなります。

トマトは土や肥料や育て方が味に敏感に反映するから難しいです。特にミニトマトの「アイコ」はふるさとファームにとって主力品種で、販売量も一番多い野菜です。自信を持って出荷するためには、まだまだ勉強が必要だと思っています。それだけに、緊張感とやりがいがあります。

### — 農業を仕事にしてよかったと思うことはなんですか。

「前に進んでいる、生きている、生かされている」と感じることでしょうか。使われていなかった牧草畑にハウスが建ち、自然と通路ができて、野菜が実りだしました。1年ごと少しずつかもしれないけれど、風景や収穫物が着実に変化していることを感じることができます。

そして私たちが作った野菜を「おいしい」と喜んで



田んぼでの田植え

くれる人に出会う機会が増えてきました。こうした経験を重ねると、素敵な仕事だなと改めて思います。

日々の仕事によって、栽培の実績が少しずつ積み重なってきました。アドバイスしてくださる先輩農家さんたちに比べると、まだまだ素人レベルだとは思いますが、主に自分が判断して農場全体を考えながら畑を動かしているのです。一年の収穫物の出来具合を左右し、責任が大きいですが、その反面本当に貴重な経験をさせていただいていると思います。

野菜は天候などで収穫物の出来具合が変わるので、その野菜を販売し運営することの大変さを知ることができました。どうやって生産量を伸ばすか、農場を運営するにはどれくらい販売できるとよいのかを考えています。農場を軌道に乗せなければ私たちの野菜を待っていてくれるお客さんがいても、野菜を育てることも、届けることも、それを続けることができないわけですから。

#### — 石山地域の皆さんとの交流はありますか。

隣の農家、菅原さんやご近所の皆さんには大変お世話になっています。多分最初は「素人が大丈夫なのか」と心配だったと思いますが、優しく見守っていただいています。特に菅原さんは当初から道具を貸していただいたり、わからないことを聞きに行ったりとお世話になっています。農作業を手伝いに行き一緒に休憩をするひとときも楽しく好きな時間です。

去年は水田を作り、お米を育てたのですが、それまで田んぼがなくなっていた石山地区に再びカエルの鳴き声が響き渡りました。地区の方から「ああ懐かしいねー」と言っていたことが、心に残っています。



主力品種のミニトマト「アイコ」



地下歩行空間での販売

#### — 丹精した野菜はどこで購入できますか。

農場横の直売所と箱詰めして直送している「札幌野菜」もありますが、やはり主力はコープさっぽろでの販売です。南区の藤野店やソシア店、清田区の平岡店などで「ご近所野菜」というコーナーに置いてもらっています。秋の漬物シーズンなどは屋外テントのイベントに参加して大根を直接販売することもあります。

#### — 消費者から寄せられた声で心に残っているものはなんですか。

去年のエダマメはすごく評判がよかったですね。「〇〇産と食べ比べたけど、お宅の方がすごくおいしかった」と言われた時には驚きました。ほかには、「ミニトマトないの?」と言われ、自分のトマトは持っていませんでしたので他の農家さんのものを探していると、「ふるさとファームのミニトマトがほしい」という意味だったらしく、「いつも探しているけど売り切れてしまって、ないのよ。今度多めに持ってきてね」と言われジーンとききました。

野菜を納品するために売り場に陳列していると、お客さんに話しかけていただいたり、質問されたりするのですが、お客さんとの会話も楽しく励みになる時間です。

こんな出来事が積み重なると、野菜を近くのお店に自分たちが直接届け、そして時々説明をしながら販売することに喜びがある。そういう機会が与えられた日々感謝しなくてはと思います。

#### — 農業に対する思いをお聞かせください。

農業って貴重で大切に、真剣に取り組まなくてはいい

けない産業だと今も昔もそう理解しています。使われていなかった牧草地を耕し、ハウスを建て、水も電気も何もないところからスタートして日々を迎えてきた中で、私が生まれ育った場所を祖父たちが開墾したすごさを改めて感じるようになりました。だから、地域に対する思いが強いのだと初めて実感に近い感覚として自分の中に入ってきました。

この農場で素人の私たちが農業を始めた、何百倍も何千倍も大変なことを、祖父たちはやってきたのだと思うと、「まだまだ自分たちはやれる」って気持ちが引き締まります。

農業は自然と触れあえるというおおらかなイメージを持つ人が多いかもしれませんが。でも従事するようになって5年たち、命の厳しさ、生きること、生き抜く力の必要性をピリピリと感じるようになりました。バランス感覚、センスも必要な仕事なのかと。

そんなことを感じたり、考えたりできる環境のなかで働けるのはありがたいです。まだまだ未熟な私です。日々学ばせてもらっていると実感しています。今はどうやってこの農場の経営を軌道に乗せ、安定させるか。まずはそこをクリアしないと次のステップに進めないと考えています。

### — 今後の夢をお聞かせください。

農場を軌道に乗せた後の個人としての夢ですが、農園のような公園を作ることですね。私自身、小さな頃から祖父母と一緒に家庭菜園の手伝いをしていたことが、今につながっているような気がするのです。「生きること」とか、「命」とか、「人」について知らず知らずに学んでいた気がします。今の都会に暮らす子ども

もたちにとって、こういう本質的なことに気づける場所だったらいいと思うのです。

ブランコが公園にあるのが当たり前のように、野菜が当たり前前に植えてあって、毎日食べている野菜がどんなふうになっているかを知ること。管理しているおじいちゃん、おばあちゃんたちと触れ合うことも自然にできるような公園を作りたいと思っています。その公園で遊んで育った子どもたちには、お年寄りを思う温かい心を育んでもらえたらいいなと…。

インタビュー  
かとうけいこ (ライター&エディター)

ふるさとファーム  
<http://www.furusato-farm.jp/>



かぼちゃの収穫



有楽町での北海道ふるさと回帰支援センター「北海道の野菜と果物ふるさとマルシェ」に参加



「札幌野菜」の詰め合わせも始めた